

スポーツには「プレイする」「観る」だけに留まらない多様性がある

日本はスポーツが体育から始まってしまっているので、「観る」とか「支える」といったスポーツのあり方がまだまだ未熟です。それはスポーツの文化性を重んじてこなかった負の証なのです。2000年にシドニーパラリンピックの車椅子日本代表のチームドクターとして一緒に参加させていただいた経験については先に述べましたが、やはりその時のボランティアの方々の言葉が今でも印象に残っています。

オリンピック・パラリンピックにはたくさんの方の選手が参加しますが、ボランティアの方はその10倍以上だといわれています。シドニーでも5万5000人ほどのボランティアの方が参加していました。どのボランティアも楽しそうなのです。

そこで、どうしてそんなに楽しそうのですかと尋ねてみると、

「プレイヤーはプレイ・スポーツをする、観客は観るスポーツをする、私たちはボランティア・スポーツをする。みな一緒に、元気を感じ、感動を覚え、仲間がいて、結局は何かを学んでいるんです」と。

多くの方にそのような返事をいただき本当に驚いた思い出があります。スポーツの触れ方にはさまざまあっていいのです。体育のように「すること」に限定され評価・優劣の成績対象になるものだと決めつける必要はないのです。そもそもスポーツは文化として存在し、「元気・感動・仲間・成長」を感じるものだからです。

パラリンピックのさまざまな種目、車椅子バスケットボール以外に私が見たのは重量挙げとゴールボール、水泳の試合でしたが、どの会場も観客で溢れていました。そう、オーストラリアは決してメダル大国ではありませんが、スポーツを文化と考え、すべての人はスポーツに触れて人生を豊かにするという考えが浸透している国なのだと感じました。そんな経験があったからこそ今こうしてスポーツとは何ぞやという、スポーツの本来持つ真髓を伝える活動をスポーツドクターの志として続けているのだと思います。